A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

68

椎名麟三
梅崎春生

中央公論社

日本の文学　68
©1968

椎名麟三
梅崎春生

昭和43年1月5日初版発行
昭和47年6月30日7版発行

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　株式会社トーブロ
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　株式会社トーブロ
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

椎名麟三
永遠なる序章　5
美しい女　128

梅崎春生
風宴　273
桜島　297
日の果て　336
突堤にて　378

ボロ家の春秋 386
幻化 425
注解 508
解説 本多秋五 518
年譜 535
口絵 「永遠なる序章」 麻生三郎
挿画 「永遠なる序章」「美しい女」 麻生三郎
「風宴」「桜島」「日の果て」
「ボロ家の春秋」「幻化」 中尾彰

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

椎名麟三

永遠なる序章

第一章

日はもうたそがれている。風が強い。砂川安太は、後を振り返って、今そこから出て来たばかりの病院を見ながら、思わず忌々しい声で呟いた。——まるで大きな墓みたいだ。

その古びたコンクリートの建物は、樹木にかこまれて、全く墓のようにひっそりしている。夕闇にうかんでいる玄関の車寄せまでが墓場のように白々しい。安太は、溜息をつくと、そこに見えるお茶の水の駅の方へのろのろ歩き出した。その彼の姿は、彼自身まで、墓場の番人であるかのように見栄えのしない恰好である。機械油のしみのある復員服、そして左足が少しおかしい。義足なのだ。それは歩くたびに、かすかないやな音を立てる。肺の駄目なことは知っていた、と彼は心に呟く。しかし心臓までが駄目になっていようとは知らなかった。今となっては、一切がもう無駄なのだ。歩くということさえ無駄なのだ。

安太は、やっと橋まで来ると、もう立っていることも出来ないように、欄干に凭れかかっていた。眼の前が暗く、このまま死んでしまいそうな気がする。駅から吐き出された多くの人々が、夜にせき立てられてあわただしく彼の後を通る。しかし彼には、もう何を考える力もない。安太は、溜息をつくと、もう一度橋の下を眺めた。山の上から谷底でも見るようにその水は遠い。ふいに自分の傍で、何かの火の粉が、強い風に小さくとび散った。気がつくと、煙草の火なのだ。そしてさらに気がつくと、すぐ傍に人間がいるのである。若い勤め人風の男で、人待ち顔に駅の方を眺めている。瞬間、安太はひどく感動している。死を宣告されたような今、すぐ傍に人間のいることに気づくことの出来る自分が強く心を打ったのだ。彼は救われたようにその若い男へ話しかけたい衝動を感じた。そして彼は上衣のポケットをさぐっている。何カ月も前の、煙草を吸っていたころの吸いさしが、くたくたになって出て来た。

「すみません、火を。」と安太は云った。

だが、やっと煙草の火を吸いつけると、彼はたちまちむせている。火をくれた男は、うろんそうに安太を眺めると、駅の方へ去って行った。安太は打ちひしがれたよ

うに、煙草を川の方へ捨てた。だが、これは赤い火の点となったままなかなか落ちて行かないで空中に長くとどまっている。一体どうしたのだろうと彼は不安になって息をつめている。しかしそれはふと消える。やはり落ちていたのだ。ただ橋の上からはその川面があまりに深すぎるのだ。

安太は、ほっと吐息をついた。するとその彼に、背身投げをしたときのことが思いうかんでいる。そう、それは十六のときだった、と彼は考える。するとそのときの感覚が、ありありと彼の肉体によみがえっている。それは思いがけない新鮮な感覚である。少年の彼は、息がつまってもがいた。それでいながら、彼は、水の中が夜だというのに昼のように異様に明るいのを見ていた。しかもその明るさは、やわらかなあたたかい諦めに似た平和を、自分の身体中に沁み渡らせていた。全くそれは思っても見ない新鮮な感覚だった。しかし次の瞬間には気を失っていたのだが。

しかし自分は、どうしてあのとき自殺出来たのだろう。その安太に、幼時からの生活が思いうかんでいる。物心ついたとき、彼は、四畳半と三畳の汚ならしい長屋に住んでいた。最初の五つか六つのころの記憶は、どうしてか波のようにそり返っている真黒に汚れきったチャブ台なのである。その脚は、一本とれていて、有り合せの板切れでそれを補ってあるのだが、ひどく不安定だった。彼は、そのために食事のたびに粗相した。そのたびに兄や姉が騒ぎ、母がわめき、父の堅い拳固が彼の頭にとんだ。全く粗相するのは、多い家族のなかで、きまって自分だけなのが彼には判らなかった。しかも彼は、食卓に向うと、苦痛なほど緊張していたにかかわらずやはりとんでもないことが起るのである。彼には、ちょっとした自分の動きにさえ自分を不幸におとし入れるそのチャブ台が、意地の悪い鬼婆のような気がしてならなかったのである。

それからあの死の畳だ。表はぼろぼろになって台だけになっている四畳半の隅の畳である。病気になった者は、その場所を専有する特権が許されて、そこへ病床が延べられる。すると不思議なように死んでしまうのである。彼の兄姉も父もそこで死んだ。少年の彼は、最初次の姉が死んだとき、その畳が死の畳であることをさとったのである。そして彼は、父や兄などがそこで死んで行くのを見た。しかし彼は、それを口にすることは出来なかった。狭い家では、そのほかに病床をとるどんな可能な場所があっただろう。しかもそれを口にするということは、かえって家族の者たちに不快を与えるに過ぎないだけではないか。だがそのためにそれを黙っていなければならないということは、やはりひどい苦痛だった。だから彼

にとっては、その畳は、いつの間にか恐怖の的となっていた。ふと、その畳の上に寝転んでいる自分に気がついたりすると、思わずあわててとび上った。そして数日は、その畳から気味の悪い死が沁み移った気がして、自分で自分の身体に脅えつづけていなければならなかったのである。

死はそのころから彼の前に立ちつづけていた。そしてついに最後には、自分と母だけになってしまったのだが、母は、自分の母でありながら、愛することの出来ない醜い老婆になっていた。そして内職のかもじのきたならしい毛を梳きながら、始終泣きそうな疲れた声で、もう生きるのは嫌だ、嫌だと呟いていた。

そのころ小学校を卒業した安太のつとめた小さな燐寸工場が思いうかぶ。震動するために燐寸の棒を立てる枠から外れてとび出した金具を、バケツへ拾い集めて歩くのが彼の仕事だった。その鉄の金具は、小さなバケツに半ばもたまると、力弱い彼には、どうしても持ち運ぶことが出来ないのだ。しかし後から後から金具はとぶ。少しずつ運んでいては間に合わないばかりか、親方がどなり散らすのだ。だからどうしても出来るだけ多く運ばなければならなかった。そのバケツの重さから、生活の重さを、生きることの重さを、少年の彼は、身にしみて十分すぎるほど知ったのである。その彼は、いつも腰をかがめて歩いていなければならないために、少年でありながら老人のように腰が曲っていた。そしてある日、母はあの畳の上に床を延べて寝ており、翌朝死んでいた。彼の十六のときである。その夜、彼は、言問橋の近くの河岸から身を投げた。生活と、死の恐怖から逃れるために。

安太は、我に返って呟いた。何を今、くだらないことを思い出しているのだろう。しかも自分にとって重要なときに、何故こんなくだらないことしか思いうかべることが出来ないのだろう。省線が、轟音を立てて同じ橋の下を通っている。彼はもう暗くて見えない川面から眼をあげ、ぼんやり駅の方を眺めた。人々が構内に渦を巻くようにあふれている。思わず彼は心に叫んでいる。全くどうすればいいのだろう。あの医者の言葉から考えれば、もう自分は永くはないのだ。つまり日ごろから自分が心から願っていたように、この世からおさらば出来るわけなのだ。全く願ったりかなったりというわけなのだ。それだのに歩く気力さえなくなっているなんて滑稽ではないか。自分がこの世からすっかり消えてなくなってしまうということが、今となってはそれほど恐ろしいことなのか。

気がつくと、安太は渦巻く人々を羨ましそうに眺めているのである。そしてその自分に気づいた刹那、彼は、

云いようのない強い戦慄につらぬかれていた。しかしその彼は、思いがけなく神秘な不可解な感情に圧倒されている。その戦慄は、恐怖のそれでありながら、性的なエクスタッシイに似た不思議な歓喜にあふれているのだ。彼はぼんやり考える。一体自分は何に襲われているのだろう。そしてこの胸に強く満ちている歓喜は、一体何なのであろう。彼は耐えがたそうに深い吐息をした。瞬間、彼は再び戦慄している。しかしその胸の歓喜は戦慄のたびに一層力をまして彼を揺り動かし、それはまた胸のなかの烈しい光のように実感される。全く自分は、どうしたのだろう。死ぬより仕方のない今、これではまるで自分は希望にみちあふれている人間のようではないか。全く自分はどうかしてしまっているのだ。

安太は、何ものかに押しやられている自分を感じながら病人とは思えない勢いで、駅の方へ歩き出さずにはいられなかった。その彼には、常にないなつかしさで、竹内銀次郎の白い顔が思いうかんでいる。そして何故、日ごろ疎遠な銀次郎の顔が、今自分の胸にうかぶのか、安太には判らないのだ。しかも今の彼に一番痛切に必要なもの、つまり彼の病気を一挙に快癒させる薬品というような感じで銀次郎に会いたくなっているのである。彼は、歩きながらも途方に暮れたように呟いた。なるほど、銀次郎は医者だ。しかし医者に会おうが何をしようがもう無駄なのである。それだのに自分は、どうしても行くのであろうか。それより下宿へ帰って寝ている方が賢明ではないのであろうか。

だが安太は、東中野にやって来てしまっていた。彼は坂道を上って行った。日はすっかり暮れて、薄暗い星明りのなかに、取り片づけられもしないで空襲のとき以来捨て置かれている焼跡が、自然に崩壊した廃墟のようなある野趣のある姿となってひろがっている。彼は、ようやくそのなかにただ一軒ぽつつりと立っているバラックへたどりついた。板壁のどこかがゆるんでいるのであろう、低い腰の羽目板の隙間から、一条の光が洩れている。彼は、その銀次郎のバラックの入口にしばらくたたずんでいた。何のためにここへ来ずにいられなかったのか、今となってもやはり彼に判らないのである。

やがて安太は、仕方なさそうに入口の板戸の外から二、三度声をかけた。しかしなかはひっそりしていて、何の応答もない。彼は、かえって安心したような気持になって、ぼんやり四辺を見廻した。遠く新宿の灯が見える。だが、ふと気がつくと、彼は、危険なほど低く垂れている黒々とした電燈の屋外線を見ていた。ただ電燈の屋外線が垂れさがっているだけである。しかし彼には、それが何故か不吉な感じがしてならないのである。そうだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

世の中の一切がゆるんでいる。今に何事かが起るだろう。しかしその何事かは、もうすでに自分にやって来ているのではないだろうか。そうだ。先刻病院を出てからだ。

安太は、我に返って、もう一度声をかけたが何の応答もない。寝てしまったのかも知れないと彼は考える。それならそれでよかったのだ。彼は帰ろうとして、遠くを眺めた。そのとき何ものか得態の知れない力が自分をつかんでいるのを感ずる。その彼はもう強く入口の戸をたたいている。何故病院を出たとき、どうしてもここへ来なければならない気がしたか、彼には判らない。しかし自分はどうしてもここへ来なければならない気のした自分を信ずるより仕方がないのだ。彼は再び強く戸をたたいている。しかしやはり何の応答もない。彼はついに入口の戸に手をかけた。すると立てつけの悪いその板戸は、思いがけなく簡単に外れるような勢いでひらいた。そして安太は、銀次郎の起きているのを見た。銀次郎は一間きりしかない六畳の片隅の柱に凭れ、紺色のズボンに茶褐色のジャケツを着た姿で、何かの木ぎれを彫っている。銀次郎は突然夢をさまされた人のような、見知らぬ人を見るような眼を安太に向けながら、重苦しそうにいうのである。

「お前か。」

安太は仕方なさそうに微笑しながら上り口に腰を下ろした。そしてしばらく銀次郎の透きとおるように白いとのった顔を見ていた。それは全く病的な感じがするほど白い。そして安太は銀次郎が軍医少尉のとき、色を白くするために亜砒酸を飲んでいたという噂のあったことを思いうかべている。しかしそれは単なる噂にしか過ぎなかったのであろう。銀次郎は再び安太には無関心に、木屑を膝のあたりへ散らしながら、小刀で木を彫りつづけはじめている。その態度には周囲への徹底的な無関心さが感じられる。だが安太は再び人のいい微笑をうかべながら、その銀次郎へ声をかける。

「何を彫っているんです。」

すると銀次郎はふと我慢ならないように、彫っていた手を膝の上へ落した。そしてしばらくぼんやり、自分は何を彫っているんだろうというように、細長い木片を見ている。それから自分を嘲るような痙攣的な笑い声を立てながら、ひとり言のようにいう。

「煙草のパイプだよ。」

「煙草のパイプ？　だってあなたは煙草を吸わないでしょう。」

「だから、お前にくれてやるさ。」

そして銀次郎は、勢いよく安太の傍に投げてよこした。手にとって見ると、なるほどパイプである。それは何か髄のある細い木でつくってあり、その木にはでたらめだ

としか思えない模様が刻んである。銀次郎は退屈そうな吐息をすると、低い声でいう。

「死にてえな。」

安太はその彼へ笑いかけながら、所在なく家の中を見廻していた。そうだ。この家へ来るのは、これでまだ三度目なのだ。それだのに、どうしてこんなに飽き飽きした気分になるのだろう。そして彼は、家のなかで火を燃すせいか、ひどく煤けてつららのように下っている蜘蛛の巣を見ている。それからただ一つの押入れには戸がまだ入らずに古びた灰色のカーテンが吊り下げられていて、その裾はぼろになって垂れ下っているのを見ている。それからまたそのカーテンの下から、ざるに入れたしおれた白菜やいろんな空罐がのぞいているのを見ている。だがただ、それだけで、そのほかに全く何も見えない部屋のなかは寒々としている。しかし、そのほかに何も見えないということが判ると、安太は再び飽き飽きした気分に襲われていた。彼は再び銀次郎を見た。銀次郎は眉に皺を寄せながら、ぼんやりしている。そこには何か滑稽なものが感じられるのである。安太は、思わず銀次郎へにこにこしながらいう。

「今日、会社から病院へ廻って、ここへ来たんです。……何の用事もなかったんですが。」

「会社？……しかし俺の知ったことじゃないさ。」

「そうです。そりゃ、全くそうですが……。」そして安太はふと思い出していう。「いいものをお見せしましょうか。」

安太は持っていた大きなハトロンの封筒を、大事そうに銀次郎の方へ手を伸ばしながら差し出した。安太のその眼は異様な期待に輝いている。それはまるで卒業証書を親に渡す無邪気な子供の眼に似ている。銀次郎は仕方なさそうにその封筒から青いレントゲン写真を引き出した。それは安太の肺のうつっているフイルムである。銀次郎はほの暗い電燈へしばらく大儀そうに透かしている。気がつくとフイルムの青い色が銀次郎の顔に落ち、たちまちその白い顔はいやらしい死人の顔に変っているのだ。やっと銀次郎は、フイルムを封筒へ入れて安太へ投げ返すと、物憂そうにいう。

「お前は知っているのだろう。」

「ええ。大体は病院の医者の言葉で想像がついているんですが。半年持てばいい方ですか。」

すると銀次郎は、ふいに思いがけない激しさで断定する。

「半年？　三月ぐらいだろう。そしたら死ぬんだ。それが正確な客観的結論だ。この結論は誰だって超えることは出来ないよ。」

瞬間安太の身体のなかをあの恐怖とも歓喜ともつかな

い戦慄が、火のように通り抜ける。その彼は感動したように微笑している。しかし銀次郎は、その安太へ、無関心な冷淡さで呟いた。

「しかし俺の知ったことじゃないさ。」

そう。全く銀次郎の知ったことじゃない、と安太は考える。しかし安太はその銀次郎へやさしい微笑を投げかけながら慰めるようにいっている。

「よかった。ほんとによかったと思うんです。あなたの口からそれを聞けたということは。」

「俺の口から？　誰の口から聞いても同じことさ。」

「もちろん、それはそうなんですが、しかし、——まあただそれだけのことなんですよ。それじゃ、来られたらまた来るつもりです。全くまた来られたらですが。」

さて、自分はどうするつもりなんだろうと安太は、銀次郎の家の灯の見えない道傍の焼け崩れた石塀のかげを見つけると、救われたように立ちどまって呟いた。三月、すると来年の二月だ。つまり後もう三度給料をもらえば、それで自分はこの世にいないのだ。すると、再び彼の身体のなかを強い戦慄が通りすぎている。彼は、呆然と石の上へ腰を下ろしながら、やはり歓喜にあふれている自分が不可解なのである。全くどうして、酔うような強い歓喜が自分を打ちひらくのであろう。こんなことは今までにないことだ。そして一瞬、安太は、この歓喜のなかに何かの啓示のようなものを感じている。その彼は、自分がまるでふいに殻をむしりとられた蛹のような感じがしている。何か自由で、何かその自由が肌寒い。

全く判らない、と安太は繰り返す。こんな晴れがましい気分なんて自分には不似合いだ。むしろ、自分のすべきことは、自分の死をわめき、呪い、自分の死の不当を人々へ訴えることではないであろうか。それともただだまって今晩自殺するかだ。しかし今、自分の前に誰かが通りかかったら、その人へ救いを求めるであろうか。いや、自分は逆に嬉しそうに、自分は三月後に死ぬのだということを告げるに違いない。

安太はあたりを見廻した。だが、あたりはひっそりしていて、先刻から人の気配もない。安太は、再び自分の思いにおち入っている。しかし自分は、一切が不可能になった今、本当に生きて行けるであろうか。生きて行けるとしても、いかにして生きて行くのか。おそらく神を信じている人は、神によってそれは可能であろう。しかし自分には神はない。自分の死を超える可能を信じ得ない者にとって、もう自分は全くの無意味なのではないか。あの医者が云ったように、せいぜいうまいものを喰って静かに寝ているべきなのではないか。もちろん、医者はその言葉で患者の死を暗示してくれたのであっても、それが医学の最善の勧告なのであろうか。しかし全く、一

切が不可能となった今、自分はどうして生きて行けばいいのであろう。何が自分に可能なのであろう。首をくくるよりほかには、何の可能も残されてはいないのではなかろうか。

安太は、ふと白川という方面委員の広い庭を、そしてそこでの生活を思いうかべている。それは身投げした彼が、通行人に救われ、警察からその方面委員の手にひきとられて五日間下男小屋でその家の下男と一緒に暮したのである。その家の生活は、安太には不思議なもののように思えた。本所の真中にこんな立派な家があるということがさらに不思議だった。築山があり、泉水があった。そしてその手入れのよく行き届いた芝生では、きれいな洋服を着た十二、三と十歳ぐらいの二人の少女が、犬と戯れていた。洋室の窓には、やわらかそうなレースのカーテンが風に揺れ、夜は何かの宴会があるらしく、レコードの音楽にまじって人々の賑やかな笑い声が聞えていた。そこには死の影すらなく、生活は軽やかに楽しく流れていた。生活、こんな生活が人間に可能であるとは、現在眼で見ながら信じられなかったほどである。

だが、終りに近いある日、安太は下男の指図を受けて植木に水をやった。そしてそれを了えてほっと一息しているとき、傍の窓から聴いた、高い調子でゆるやかな旋律をもったピアノが彼の耳を打ったのだ。それは彼をひどく動かした。それは学校にもなかったピアノなのである。そしてそのピアノの音が、こんな彼の身近に起ったことが、彼を驚かせたばかりでなく、あの上の方の少女がひとりで弾いていることに驚いたのだ。そしてまた、そのピアノの音がその生活の象徴のように流れて来て彼を打ったのだ。だが、すぐ翌日、彼は、その当時今つとめている郊外電車の大株主であったその方面委員の手から、内田という運転課長の手に渡された。そして次の日から、その郊外電車の小さな駅の駅手見習として毎日その家から通った。しかしその家の生活は、子供もなく、大きな家に住みながら、ときに菜を買う金もないときがあった。地代はとどこおり、自分のものであるその家も担保に入っていた。そして深夜、五十近いその男は、酔いどれて帰って来たと思うと、いきなりその妻をなぐりつけるのだった。もちろん、家に帰らない日が多かった。妾を三人かこっており、そこを廻り歩いて泊るのだ。しかし会社では部下にも上司にも評判のいい男で、給仕にも冗談を云って笑わせるのだった。しかし安太は彼のかげの生活を知っていた。商人が来て密談していることも多く、その家も会社の資材で建てたという噂さえあった。しかし安太に対しては、夜中、たたき起して、酒くさい息を吐きながら、理由もなく大きな声で罵倒するのだった。「おい、死に損い。一体誰のおかげで生きていると

思う。俺を誰だか知っているか。俺がいなかったらT電は動かないんだぞ。」それが明け方まで繰り返しつづけられるのである。その彼に云われる言葉は、そっくりそのまま、妻にも繰り返されるのだった。そのようなとき、彼は、彼が引き取られるまで物置同様になっていた女中部屋の薄い蒲団の中で、深夜から夜明けまで、罵声や物のこわれる音や、妻の悲鳴をじっとこごえた心で聞いていた。その妻は、いつも泣きはらした眼で、台所の隅でいつもぼんやりしていた。ずっと後に二階への階段から突き落されたのが原因で、死んで行ったのだが。そうだ。その葬儀には、妻の親戚は一人も見えなかった。彼女には親も親戚もなかったのだ。彼女は、その課長の大学生当時の下宿先の女中であったことを、そのとき知った。それでありながら彼女は、安太へロを利いたこともなく、食事の世話もしてくれたことはなかった。ただいつも暗い顔をして、黙り込んでいた。彼女の死後、妾の一人がその後に直った。それは、その会社の事務員をしていた女であったが、そのときもう安太は出征していたのである。

死に損い。それは夜更け安太に対して怒鳴り散らされる罵声から付近に知れ渡っていた。それとともに、自分の給料は、会計から直接運転課長に支払われ、死に損いは自由になる一銭の金も持っていないことも知れ渡っていた。しかしその家の塀にほとんど喰っつくように立っている裏の長屋の人々は、安太を何かと慰めてくれた。そのなかに山本というアナーキストが住んでいた。画家の彼はときにやって来る警官の前でも平気で春画を描きつづけているという男だった。彼は春画を描いて生活を立てていたのだ。世の中は、次第にファッショに傾き、山本のような思想をもつ者への弾圧は苛酷を極めていたが、その山本という男だけは、何か特権でも持っているように自由であった。彼の左翼関係の蔵書も何の制限も受けてはいなかった。その彼が、ある日、十六の安太に一冊の本を貸してくれたのである。それ以来次々と彼は安太に本を読ませた。しかしその本は、十六の安太には何とむずかしい本であっただろう。その本でやっと覚えたものは、フーリエやバクーニンやクロポトキンなどの名前にしか過ぎなかった。だが、そのなかで安太を今に至るまで支配しつづけている自由という言葉を覚えた。それはあのピアノの音と不思議に諧和するただ一つの言葉だったからだ。最初の自由への衝動は、運転課長への反抗であった。それは彼自身の意味では、現在の社会組織への反抗を意味していた。その家をとび出して、知り合った車庫の工務員の家に間借りをした。そう。十八のときだ。たちまち、以前の方面委員に呼びつけられ、恩知らずをののしられた。それは腹が苦しそうにふくれて

いる、太った、顔の丸い四十過ぎの男だった。自由が欲しいんです、と安太は云った。自由？　と不審げな顔をしたその方面委員は贅沢な肘掛椅子のなかで何を生意気いうかという風に急に笑い出した。そして笑いに咽喉をつまらせながら、それはデパートで売っているのかい？と云った。安太はだまっていた。すると彼は怒ったように云った。金をいくらでも出してやるから、それを今から行って買って来て見せろ。それからでないと、今まで世話になっている家から出ることは許さない。

そうだ。安太はその方面委員の家を出ると、その足でデパートへ行き、長い間休憩室に腰を下ろしていた。そしてただ人々の動きをぼんやり眺めていた。それから安太は、再び運転課長の家へ戻って行ったのだった。そして寝ても起きても会社支給の制服一着という姿で、車掌となり、工務員となった。車掌から工務員となったのは、職場でさえ運転課長の支配下にいることが耐えられなかったからだ。その安太は裏のアナーキストから本を借りて来て、暇さえあれば読みふけった。自由！　自由！それを求めて安太は叫んでいた。その安太のなかには、常にあのピアノの音が流れていた。そしていつの間にかそのピアノの音とともに一つの幻想がうかんで来るのだった。それは死や生活の重さのない自由の国の人々の顔であった。それは貧しい服装ながらも幸福にかがやき、にこやかに自分へ声をかけるのだった。

「今日は。いいお天気ですね。」すると自分も同じ言葉を微笑しながら答えずにはいられないのだ。「今日は。ほんとにいいお天気ですね。」

ただ、それだけの幻想。全くただそれだけの幻想。しかし彼らの声は、うたうようなひびきをもっていた。それはあの、明るいピアノの旋律と何とよく諧和したであろう。そして安太はその幻想の実現の手段を求めて、むさぼるように本を読んだ。無政府主義から共産主義を知った。しかしそれらの思想に共鳴を感じるようになってから、妙なことに夜になると、死の恐怖に襲われ、寝床の上にとび上るのだった。安太は、何故自分がある思想をもちはじめるや否や、死の恐怖に襲われるようになったのか自分に理解出来なかった。きっと身体が弱っていたのだろう。その彼は、人間が死から自由になるときにはじめて、それらの革命が有力な意味をもちはじめるのではないかという疑惑にとざされがちだった。そうなのだ。人間が死から自由になったとき、革命が、真実のそして唯一の革命となるだろうという気がしたのである。生活を重くするだけにしか過ぎない現在の一切の社会制度は今すぐにどうしても破壊されなければならぬ。しかし人間の物的なものからの解放が、同時に死からの解放でないかぎりは、その革命は、いたずらな悲劇となるに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo